東海地方の灰釉陶器

柴　垣　勇　夫

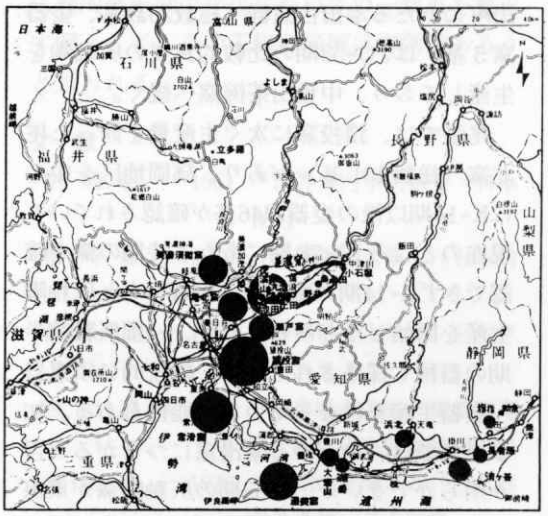
平安時代の東海地方で使用された土器・陶器には、土師器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器などがあるが、古窯跡出土の須恵器・灰釉陶器を除いて時代を限定できる出土例に乏しく、特に9世紀以後の土師器・須恵器の編年的研究は、他地方に比べ立ち遅れている。したがって、ここでは、現在、編年体系の確立されている灰釉陶器について述べることとする。

1．猿投窯における灰釉陶生産

尾張東南部の丘陵（猿投西南麓）に分布する古窯跡は、5世紀末から14世紀にかけて築窯されており、その数は1,000基を越すが、このうち、奈良時代後半から平安時代にかけてのものは374基あり、うち瓷器窯159基の存在が確認されている。昭和30年代の調査成果をもとに組みたてられた編年観（楢崎'61）は、現在も大綱としてかわらず、次のように時期区分されている。すなわち、8世紀後半から開始される灰釉陶器は、10世紀前半代を境に前・後の2段階にわけられ、それぞれに3窯式の様式設定がなされ、鳴海32号（NN-32）、折戸10号（O-10）、井ケ谷78号（IG-78；K-78を呼称変更―県教委'80）、黒笹14号（K-14）、黒笹90号（K-90）、折戸53号（O-53）の6窯式期がおかれたのである。（本展「図録」参照）

各期はすでに概説されているところであるが、変遷の主要素は、前年の段階ではN-32期における灰釉の発生と、従来の須恵器々種の中で、器種を限って施釉したり、金属器写しの新器種の登場などそれまでの須恵器生産が大きく変貌すること。O-10期には、初現的な灰釉椀が登場し、さらにIG-78期に長頸瓶における頸部接続技法が三段構成から二段構成に転換するなど、製作技術の進歩が認められることがあげられている。後半期では、K-14期以後、須恵器生産は量的に低下し、新たな器種の登場と、ほとんど全器種に施釉されるという現象がみられ、焼成技術の一段の進歩にそって、K-90期へかけて量産化がはかられる。この期以後、陰刻花文、輪花が登場する。O-53期には、灰釉陶全般に退化現象がみられ、椀・皿を主体とし、壺・鉢・耳皿等小数の器種を焼成するのみとなる。焼成技法上は、K-90期後半に出現した固定分焔柱や馬爪焼台などを用いた容積の大きな中世山茶椀窯へと移行する傾向を強くもつものとなる。

これら製品の消費地出土例は、前半期には主に畿内中心に限られていたが、K-14期以降北は岩手県胆沢城、秋田県男鹿半島、西は佐賀県に至るまでの広がりを示している。最近では、関東地方での出土例の多さが目をひく。なお、K-14、K-90期には、黒笹地区に40基もの古窯跡が確認されていて、この地区が官工房的な役割を荷っていたと考えられている。



第1図　灰釉陶窯、山茶椀窯の分布

2．周辺地区の灰釉陶生産

現在知られている猿投窯以外の灰釉陶生産窯の東端は、西駿河の藤枝市助宗古窯群で、奈良時代を中心とした81基の古窯跡の中に、O-53期のものが認められるが、その実態はまだ明らかでない。ついで島田市旗指古窯群が灰釉陶器を中心として約20基存在する。O-53期の中での前後関係と以後の中世山茶椀窯への移行過程をたどることのできる地区である。

遠江では、小笠郡大須賀町清ケ谷古窯群（総数50基）の中に O-53期 に属する10基以上の瓷器窯があり、遠江での灰釉陶の一大生産地といえる。浜北市浜北古窯群には瓷器窯数基があり、吉名古窯の陰刻花蝶文稜椀は、K-90期に灰釉陶生産を開始していることを示している。湖西古窯群は、奈良時代の窯 200 基を含む総数 300 基を越す静岡県最大の古窯群であるが、瓷器窯は、最末期のものが早稲川支群に認められているにすぎない。但し平安末期から鎌倉期にかけての山茶椀窯60基が存在し、中世窯としての生産量の多さを示している。

三河では、豊橋市大岩古窯群（総数40基、うち瓷器12基）の中に、K-14期の椀・皿類が出土していて、比較的早く瓷器窯の操業されていたことが知られる。西三河の岡崎市と幸田町にわたる幸田古窯群（総数20数基、瓷器窯 5 基）は、O-53期の比較的良質の灰釉陶を生産しており、中世山茶椀窯へ続く。

尾張では、猿投窯に次ぐ生産量を誇った尾北窯（総数 101 基）があり、篠岡地区を中心にK-14期以後の瓷器窯46基が確認されている。現在のところIG-78期にあたる時期の窯が確認できずK-14期に猿投窯の影響のもと灰釉陶生産を開始したとみられるが、一部灰釉前半期の器種も採集されていて、継続的に須恵器・瓷器生産を行なっていた可能性もある。知多半島では、いわゆる常滑窯につながるか否か明らかでないが、O-53期の灰釉陶窯が東海市・大府市・武豊町の 3 か所に確認されている。

美濃では、岐阜市・各務原市から北部の関市に至る美濃須衛古窯群があり、奈良時代を中心として 151 基が確認されているが、このうち瓷器窯は34基確認されている。関市北部古窯群にK-90期の製品がみられ、この期から灰釉生産が開始され、13世紀の灰釉四耳壺を焼成した中世陶窯に続き、以後衰退する。一方、東濃地方の美濃古窯群（総数 550 基、中世山茶碗窯が主体）では、瓷器窯64基があり、尾北窯を凌ぐ生産量をあげたことが知られる。その灰釉陶生産開始期はK-90期で、O-53期には東山道沿いに、東日本へかなりの流通をみせている。奥美濃の白鳥町立多羅古窯や、飛騨高山のよしま古窯は、灰釉陶窯の分布する北端で、灰釉最末期のものである。

伊勢には、桑名員弁古窯群の中の七和二号窯がK-90期後半に、四日市市岡山古窯群（総数15基）の中の 2 基が灰釉最末期のもので、僅かながら灰釉陶生産窯が認められる。

近江には、水口町の春日山の神窯に緑釉併焼の灰釉陶窯（K-90期）があり、灰釉陶窯分布の最西端にあたる。

以上が現在知られる灰釉陶窯の分布であるが、これらを要するに、K-14期に開始するもの、K-90期に受容をみせる地域、これにやゝ遅れて受け入れる地域があり、また単期間のうちに消滅してしまう地域、引続き中世山茶碗窯へ転換していく地域など、その様相は多岐にわたり、古代末期の生産形態の多様化を物語る。

3．灰釉椀から中世山茶椀への転換時期

さて、灰釉陶窯から中世陶窯への移行は、律令制の崩壊から荘園経済への移行過程の中でとらえられ、台頭する在地領主層や、寺社勢力、在庁官人層を中心として活発な動きをみせる11世紀末から12世紀にかけての院政期がその大きな転換期と考えられるが、この期の猿投窯における製品は、少量の壺・鉢のほかは無釉の椀（山茶椀）、皿で、これを大量に

生産する窯へと変化する。この椀は、高台下にもみ痕を多量に残し、14世紀にかけて年代的変化をみせるが、その初期のものには、もみ痕をもたず、灰釉最末期の形態と酷似する。これを山茶椀窯の最初の時期におくことができる。これは、三筋文陶器編年Ⅰ期(楢崎'78)にあたり、H-105の時期である。三筋文Ⅱ期の三筋文壺を出土しているH-61号窯では、瓦類を併焼していて、軒丸瓦は12世紀前半代に京都鳥羽離宮東殿へ運ばれていてその操業年代を知ることのできるものである。

ところで、H-61号窯には、玉縁口縁状の小椀（通常山茶椀と併焼している小皿）が認められる（本展図録巻末実測図15-11,12）が、この種の椀類が各窯で検出されだし、初期山茶碗に伴うものと考えられるので、その年代観も合わせて検討してみよう。

猿投窯東山地区では、H-61号窯に隣接するH-79号窯には、もみ痕をもたない高台で、玉縁の輪花椀と、同じく玉縁口縁の小椀(第2図8～10) がある。H-105号窯にも同類の小椀があって、このH-79号窯はH-105期に編年しうる。

猿投窯瀬戸地区の末期灰釉椀の中にこの玉縁口縁椀の初現的な形態(Ⅰ)をみることができる(第2図～1～3)。このうち南山12号窯(鉢割古窯）は最末期の灰釉であるが、主体をなす灰釉椀は、南山8号窯の山茶椀とさほど差がない。南山8号窯で出土している玉縁は、この初現的なもの(同図4～6)と、小片ながらH-79号窯に似るもの(同図7)とがある。8号窯はH-105期そのものと考えられる。

猿投窯黒笹地区南端にあたるK-G-41～45号窯（八和田山1～5号窯）では、1～4号窯から少量ながら玉縁口縁の椀類が出土している。特に1、3号窯に典型例があり、鉢型を呈するものもある。これらの口縁を形態的に検討すると、回転を利用して口縁を肥厚させ、口縁下に沈線をめぐらして浮き出させる方法によって薄手のもの(Ⅱ)と厚手のもの(Ⅲ)を作り出している。体部は、薄手のものが腰部から内弯する形態をとり、厚手のものは直線的にのび口縁内側端部を内弯させる形である。高台は三角形の輪高台で、通常の山茶椀とかわらない。この古窯群で最初に築窯された2号窯では、量産している通常の椀・皿は、三角高台で体部も大ぶりである。もみ痕はつかないものと、わずかにつくものがある。玉縁椀は、すでに薄手のものが主体である。

これらを東山地区のものと比較すれば、2号窯はほゞH-105併行期におくことができる。

さて、玉縁口縁は、中国陶磁の白磁碗を写していると考えられるが、日本出土の白磁碗に類似品をもとめると、京都壬生車庫遺跡(左京四条一坊）出土の寛治5年（1091）銘墨書須恵器との併出品、大宰府SK-976出土品に類似するものが、薄手玉縁の椀であり、福岡県武蔵寺経塚出土品（12世紀前半）類似のものが厚手の椀と考えられる（亀井発表参照)。

このことから南山8号窯、H-105（H-79）号窯および八和田山2号窯は11世紀の第4四半期におかれ、三筋文陶器Ⅰ期の年代観は、妥当である。したがって中世山茶椀窯への転換を院政開始前後におくことができよう。

最近、猿投窯編年の年代観と官衙遺跡等における年代観とのずれが問題となっているが、灰釉陶最末期の年代についての一致点を見出す例として、この玉縁口縁椀は有効であろうと思われる。

文　献

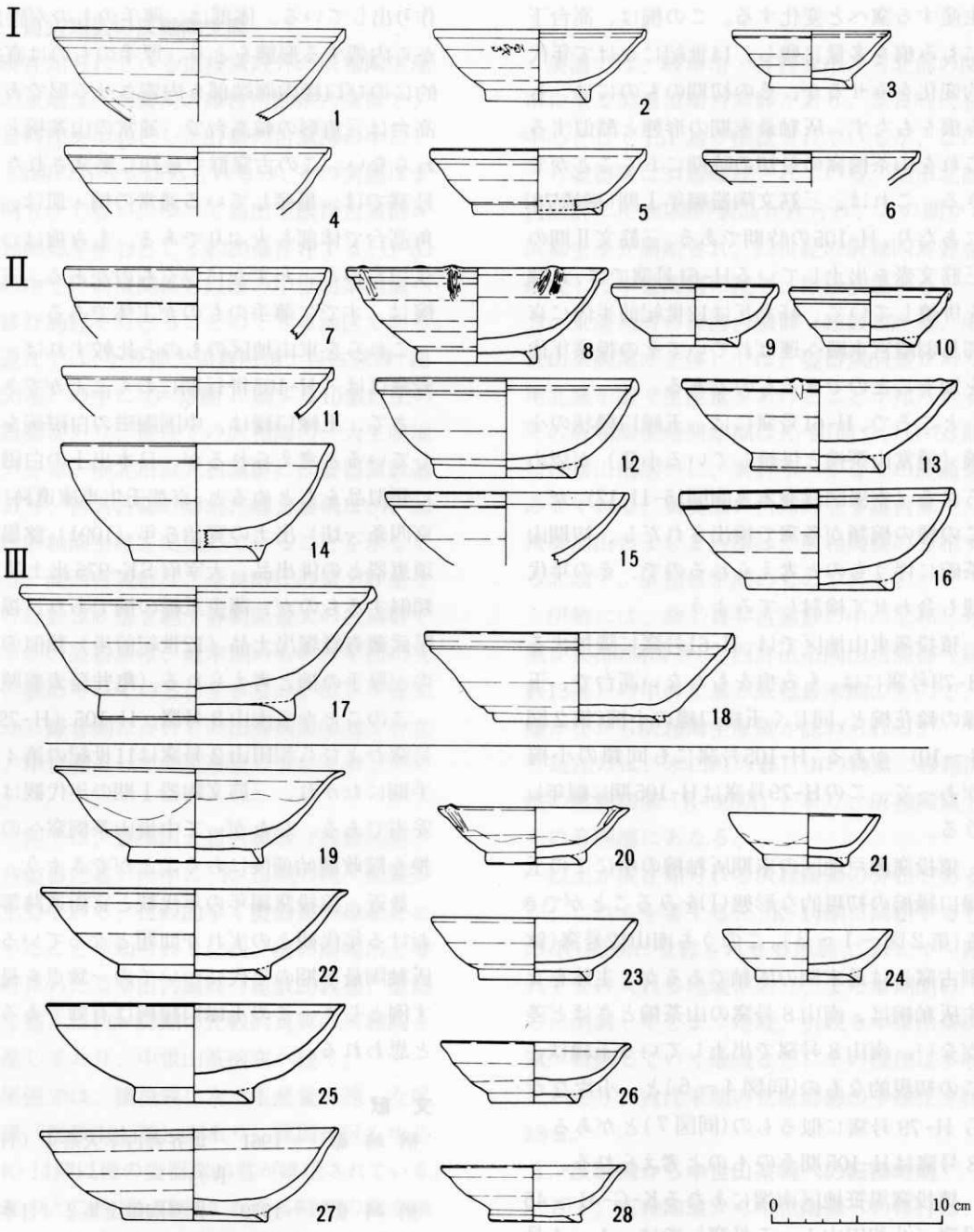
楢崎彰一 1961 「世界考古学大系4（日本Ⅳ)」

楢崎彰一 1979 「世界陶磁全集2（日本古代)」

静岡県考古学会 1979 「静岡県考古学会シンポジューム2」

吉田英敏 1981 「岐阜県考古8」(「美濃須衛窯における瓷器の様相(1)」)

楢崎彰一 1978 「初期中世陶における三筋文の系譜」名大論集。



第2図　玉縁口縁椀形態図

1．鉢割1号(南山12号)窯　2．百代寺窯　3．広久手E窯　4．～7．南山8号窯
8～10．東山79号窯　11．12．八和田山2号窯(K－G－42)　13～15，17．18　八和田山1号窯(K－G－41)
16．八和田山3号　19．広久手F　20．鉢割1号窯　21．広久手C1窯　22～24．南山8号窯
25．26　東山79号窯　27．28　八和田山2号窯。

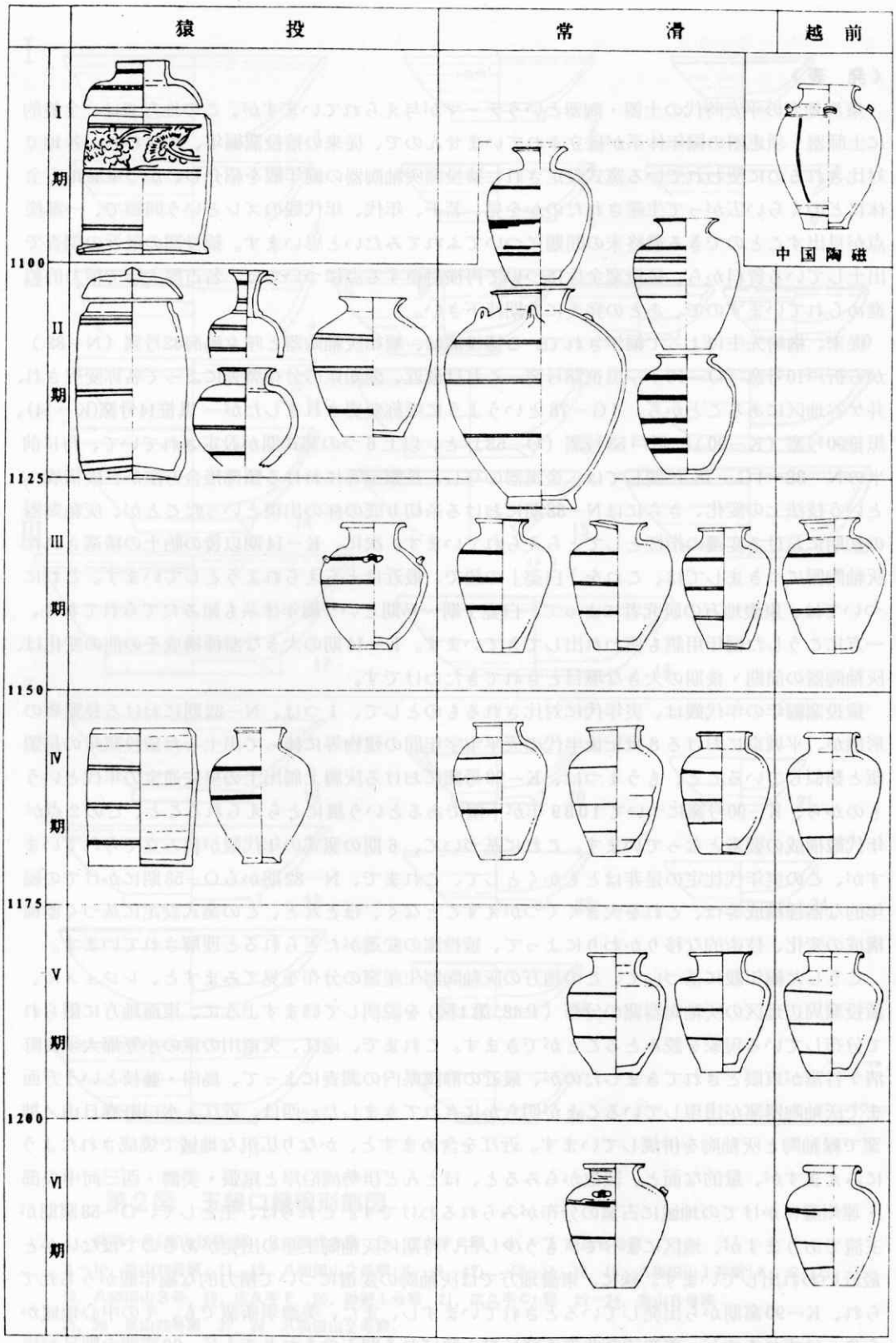
《発　表》

東海地方の平安時代の土器・陶器というテーマが与えられていますが、この地方では、全般的に土師器・須恵器の編年体系が確立されていませんので、従来の猿投窯編年、すなわち、各地で対比されるのに使われている窯式設定された猿投窯灰釉陶器の編年観を紹介し、かつ東海地方全体にどのくらい広がって生産されたのかを見、若干、年代、年代観のズレという問題で、一部接点が見出すことのできる最終末の問題についてふれてみたいと思います。猿投窯の最近の調査で出土している資料から、猿投窯全体について再検討をする点については、名古屋大学で精力的に進められていますので、あとの発表にご期待下さい。

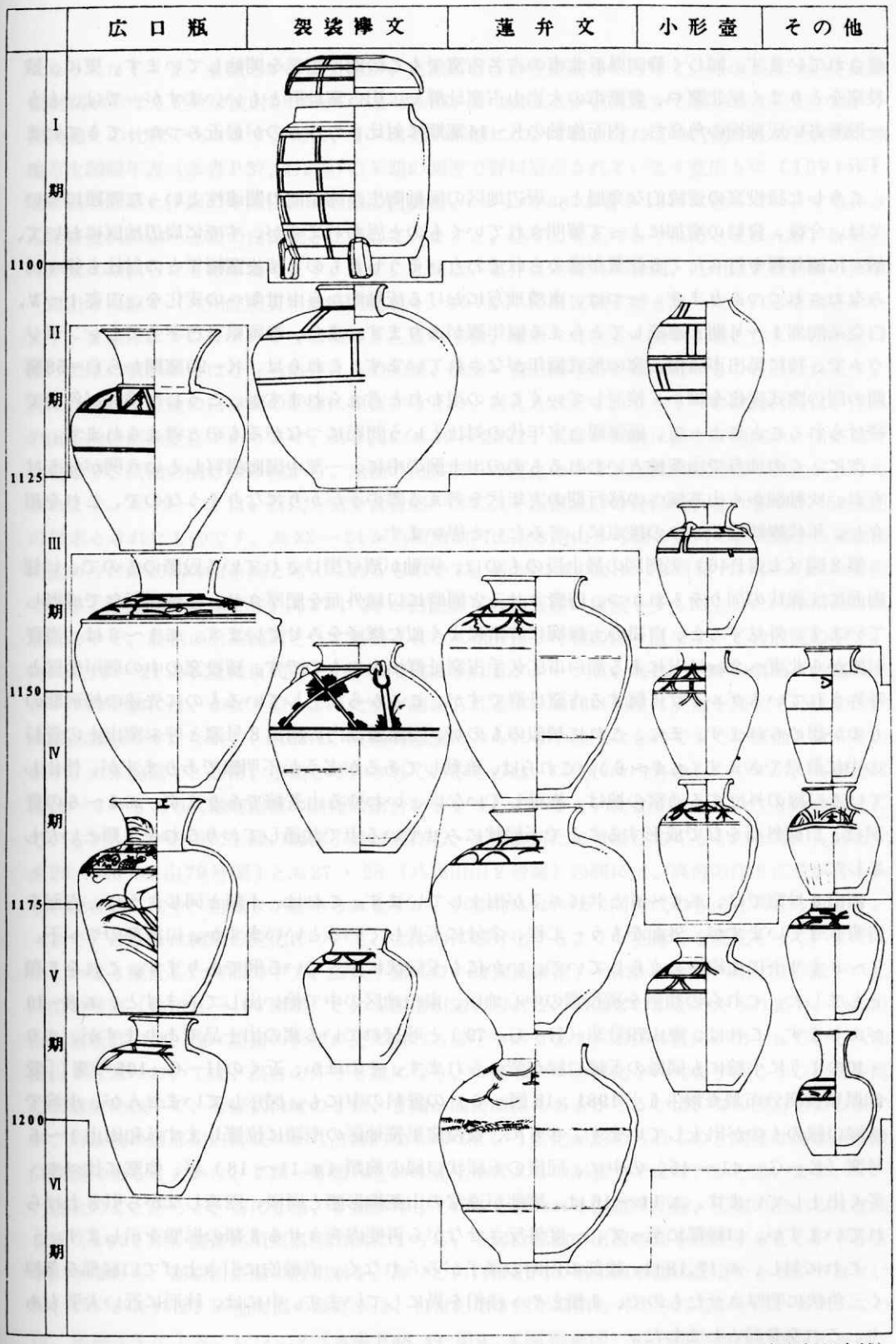
従来、楢崎先生によって編年されている猿投窯は、原始灰釉陶器と呼ぶ鳴海32号窯（N－32）から折戸10号窯（O－10）、黒笹78号窯－これは最近、愛知県の分布調査によって名称変更され、井ケ谷地区にあることから、IG－78というように呼称変更されましたが－黒笹14号窯(K－14)、黒笹90号窯（K－90）、折戸53号窯（O－53）と、以上6つの窯式期が設定されていて、特に前半のN－32～IG－78に関しては、金属器の写し、長頸瓶等における頸部接合方法が三段構成へという技法上の変化、さらにはN－32期における糸切り底の杯の出現といったことが、灰釉陶器の初期における変遷の指標としてとらえられています。次に、K－14期以後の胎土の精選された灰釉陶器につきましては、これを「白瓷（しらし）」の語で、最近はとらえられようとしています。これについては、東濃地方の研究者によって、白瓷I期～IV期という編年体系も組みたてられており、一方にこうした編年用語も使われ出してきています。K－14期の大きな器種構成その他の変化は、灰釉陶器の前期・後期の大きな境目とされてきたわけです。

猿投窯編年の年代観は、実年代に対比されるものとして、1つは、N－32期における長頸瓶の形態が、平城京における8世紀後半代の天平宝字年間の建物等に伴って出土した猿投窯産の長頸瓶と類似していること、もう1つは、K－90号窯における灰層上層出土の皇宋通宝の年代というものから、K－90号窯について1039年が下限であるという風にとらえられること、この2点が年代観構成の要素となっています。これに基づいて、6期の窯式の年代観が組み立てられていますが、この実年代比定の是非はともかくとして、これまで、N－32期からO－53期にかけての編年的な器種構成等は、これを大きくくつがえすことなく、ほとんど、この窯式設定に基づく器種構成の変化、技術的な移りかわりによって、猿投窯の変遷がたどられると理解されています。

こうした編年観に基づいて、この地方の灰釉陶器生産窯の分布を見てみますと、レジュメに、猿投窯周辺地区の灰釉陶器窯の分布（P43, 第1図）を説明していますように、東海地方に限られて分布している現象を読みとることができます。これまで、遠江、天竜川の東の小笠郡大須賀町清ケ谷（せいや）窯が東限とされてきましたのが、最近の静岡県内の調査によって、島田・藤枝という方面まで灰釉陶器窯が出現していることが明らかにされてきました。西は、近江・水口町春日山ノ神窯で緑釉陶と灰釉陶を併焼しています。近江を含めますと、かなり広汎な地域で焼成されたようにみえますが、量的な面と、窯数からみると、ほとんど伊勢湾沿岸と尾張・美濃・西三河中央部・遠州灘にかけての地域に古窯の分布がみられるわけです。これらは、主として、O－53窯期が主流でありますが、地区によって、もう少し古い時期に灰釉陶生産の出発があるのではないかと最近いわれ出しています。殊に、東濃地方では灰釉陶の変遷について精力的な編年観がうちたてられ、K－90窯期から出発しているとされていますし、また、美濃須衛窯でも、その中心地域からやゝはずれますが、美濃須衛北部古窯址群と呼ばれる関市のあたりでもK－90窯期の製品が生



第3図　猿投・常滑・越前三筋文陶器編年図　（楢崎'78文献）



第4図　渥美三筋文陶器編年図　（楢崎'78文献）

産されています。同じく静岡県浜北市の吉名古窯でもこの期に生産を開始しています。更に、猿投窯をとりまく尾北窯や、豊橋市の大岩山古窯址群－二川古窯址群ともいいますが－では、もう一段階古い灰釉椀の角高台・内面施釉のK－14窯期に対比されるものが最近みつかってきています。

こうした猿投窯の連続的な発展と、周辺地区の灰釉陶生産開始期の関連性といった問題については、今後、資料の増加によって解明されていくものと思われますが、すでに周辺地区において、個々に編年観を打ちたてる作業が進められており、そうしたものと猿投窯編年との対比も徐々にみなおされつつあります。一つは、東濃地方における灰釉陶から中世陶への変化を、白瓷Ⅰ～Ⅳ，白瓷系陶器Ⅰ～Ⅵ期と連続してとらえる編年観があります。また、静岡県考古学会でもシンポジウムで、特に島田市旗指古窯の形式編年がなされています。これらは、K－90窯期からO－53窯期の間の窯式変化を細かく検討していくことの現われと考えられますが、こうした検討が各地で続けられることによって、編年観と実年代の対比という問題につながるものと考えられます。

次に、この地方で山茶椀といわれるものの出土例の中に、一部中国陶磁写しという例が見うけられ、灰釉椀から山茶椀への移行期の実年代を考える際の手がかりになりそうなので、これを紹介し、年代観問題の一つの接点にしてみたいと思います。

第2図（本書P46）実測図の最上段のものは、灰釉が漬け掛けされている段階のもので、口縁内面に沈線状の削りを入れかつ、内弯させると同時に口縁外面を肥厚させ、轆轤回転なで成形しています。外見すると、白磁の玉縁碗に非常によく似た様子をみせています。№1～3は、当資料館から北東へ2㎞ほどにある瀬戸市広久手古窯址群出土のものです。猿投窯の中の瀬戸地区と呼称されているグループに属する古窯址群ですが、ここから出土しているものに先述の椀形態のものが認められます。また、これに類似のものが、当館敷地内の南山8号窯と呼ぶ窯出土の資料の中に散見できます（№4～6）。これらは、施釉してあるかどうか不明瞭でありますが、伴出している口縁の外反する通常の椀は、施釉していない、いわゆる山茶椀であります。№1～6の資料は、口縁外面をなで成形することで玉縁状にみせている点で共通しておりこれをⅠ類といたしました。

南山8号窯では、№4～6と共に№7が出土しています。これは、Ⅰ類と同じように、内面を内弯させていますが、外面をもう一工程、余分に工夫しているといいますか、口縁部のやゝ下、7～8ミリ下に沈線をめぐらしていて、いかにも玉縁状に作っている例であります。これをⅡ類としました。これらの類例を猿投窯の中心地区、東山地区の中で拾い出してみますと、№8～10があります。これは、東山79号窯（H－G－79）と呼ばれている窯の出土品でありますが、№9・10のように小椀にも同様の玉縁口縁が認められます。そのほか、近くのH－G－105号窯（「愛知県猿投窯分布調査報告Ⅱ」1981；18図－6）の資料の中にも、図示していませんが、小椀で玉縁口縁のものが出土しています。さらに、猿投窯黒笹地区の南端に位置します八和田山1～5号窯（K－G－41～45）の中に、同様の玉縁状口縁の椀類（№11～18）が、他窯に比べやゝ多く出土しています。№11～16は、腰部が通常の山茶椀形態と同様、内弯しながら引き上げられていますが、口縁部に至って、一度外反させながら再度内弯させるⅡ類の形態を示します。

これに対し、№17,18は、腰部の内弯の様子がみられなく、直線的に引き上げて口縁部を部厚く三角状に肥厚させたもので、Ⅱ類とやゝ様相を異にしています。中には、鉢形に近い大型もあり、これをⅢ類としました。

こうしたⅠ・Ⅱ・Ⅲ類という把え方が、実際にどういう変遷をたどっているのかについては比較材料が少なく充分な検討ができていませんが、2つのことが言えるかと思います。1つは、中国陶磁との比較であります。特に、Ⅱ・Ⅲ類の形態については、先ほどの吉岡さんの発表の北陸地方土師編年表（本書P37,第2図）のⅤ期の関連で資料呈示されています寛治5年（1091年）墨書銘須恵器と伴出の中国白磁碗類似の白磁碗、レジュメP33（本書P131）に載っています亀井さん発表資料の①～④類の白磁碗と比較してみますと、必ずしも丸写しではありませんが、形態的に非常に類似したものがあります。まず、Ⅱ類は、亀井さん資料の②類、九州歴史資料館の横田・森田さん編年（九州歴史資料館研究紀要4，1978）の白磁碗Ⅱ類と同一視されるものと思います。Ⅲ類は、レジュメの中では亀井さん資料③類、横田・森田さん編年Ⅲ類としましたが、口縁の肥厚の状態からはむしろ亀井さんの④類、横田・森田編年のⅣ類に近いものと思われます。共に11世紀末以後の白磁碗の形態に類似するものと考えられます。もう1つの検討材料は、伴出の山茶椀の形態変化であります。第2図の№19～28は、玉縁口縁椀に伴う灰釉椀や、山茶椀・小皿類で、灰釉の漬け掛け椀から、無釉の山茶椀への変化の中で玉縁状口縁形態の変化がとらえられます。№19～21は、百代寺窯を含む瀬戸市広久手古窯址群の資料で、これまでO－53窯期の最末とされたものです。№22～24が当館敷地内にある南山8号窯の資料で、灰釉から無釉椀に変わった最初期の山茶椀と考えられるものです。№25，26はH－79号窯（H－G－79）の資料で同じく最初期のものです。№27，28が白磁碗写しの玉縁口縁椀を多く出土した八和田山古窯址群の中で、最初の山茶椀窯として築窯された八和田山2号窯の椀・皿です。この形態の中で、特に№19～21の、主に百代寺という窯で代表されるグループと、№22～24の南山8号窯のグループの形態には、かなり似かよった点が認められます。№19は明瞭に灰釉を施していますが、№22は無釉です。しかし、№23は、灰釉陶器窯にみられる小椀的なものですでに無釉となっています。山茶椀窯で、通常、小皿と呼称されているものは、口径10㎝内外のものですが、№23は口径12～3㎝もあり灰釉陶器窯の器種の組合わせを残しているといえます。こういうものの存在しているグループの中に玉縁口縁椀Ⅰ類が残存し、Ⅱ類が新たに登場してくるものと考えられます。№25・26（東山79号窯）と№27・28（八和田山2号窯）の間には、高台の作りに差が若干あり、後者の方にやゝ粗雑さが認められますが、形態的には、ほゞ同時代のものと考えられます。

さて、こうした椀類の変化について、全体的に細分化するような見通しを現在もっていませんが、かなり接近した時間の中で、広久手窯（O－53窯期最末）→南山8号窯・東山79号窯→八和田山2号窯（共にH－105窯期）という変遷が認められるのではないかと考えられます。八和田山古窯址群では、椀・皿類の形態が更に崩れる様子をみせます。№16の資料が出土している八和田山3号窯においては、高台の作りも雑になり、口径もやゝ小形化をみせます。こうした山茶椀の形態変化の中で、玉縁状口縁のⅡ類、Ⅲ類が前後関係にあるかどうかは、なお検討を要しますが、山茶椀の腰部が内弯気味から直線的なものへという変化が認められるのと同様な現象が玉縁口縁椀にあることから、Ⅱ類→Ⅲ類へという変化を考えるのが妥当ではないかと思います。

以上のことがらと、特にⅡ類、Ⅲ類が写していると思われる白磁碗②類、④類の出土した寛治5年（1091年）墨書銘須恵器伴出例にてらし、玉縁口縁椀の出現時期を想定することができます。すなわち、初期山茶椀の最初期を、ほゞこの11世紀代の第4四半期に設定できるのではないか、いいかえれば、灰釉陶器の最終末は、11世紀第3四半期頃と考えられるかと思います。これは、楢崎先生による、レジュメ（本書P48,49,第3，4図掲載図）の三筋文陶器変遷図にみる三

筋文陶器第Ⅰ期が11世紀代におかれていること対応します。この三筋文陶器第Ⅰ期は、灰釉末期O－53窯期の次にくるH－105窯期とも呼ばれていますが、11世紀第4四半期とする実年代は、こうした玉縁口縁の椀の出土例からいっても妥当ではないかと思います。

O－53窯期最末の実年代下限は、11世紀第4四半期以前におかれる可能性が強いということになろうかと思います。猿投窯編年の年代観のヅレの一つの接点をみつけ出す参考資料として、述べさせていただきました。（発表以上）

―― 質 疑 ――

（質問－亀井明徳）　亀井でございます。引用されましたので、一言いわせていただきます。先程、吉岡先生のお話にもございましたが、寛治5年の井戸というのが盛んに引用されておりますが、ここから出土の白磁碗にも当然巾があるわけでして、その巾が大体さかのぼっても11世紀中頃くらいではないかと思います。この②類の玉縁の白磁碗は巾の少ないもので、1100年代の前半くらいのもので、以降はあまりないように思います。巾の点では、レジュメP33（本書P131）に載せました④類、柴垣さんの図のⅢ類に似ているといわれた④類は、大変息の長い白磁でありまして、12世紀前半代から13世紀にも随所で出土するものなので、必ずしも、上限はいいとして、下限を決めるにはあたらないと思います。質問を一つ。この発表の玉縁口縁は、現物をみていませんが、図でみると、いずれも沈線で膨ますという感じですが、折り曲げたり、違う粘土を貼りつけたりするものはありませんか。

（柴垣）　沈線がほとんどであります。第2図№10は折り曲げ例ですが、他にはないと思います。

（補；東山79号窯および105号窯では、その後の検索で、沈線のほか折り曲げによる玉縁口縁が数例前後あるようである。他の窯には今のところ確認されていない。）